

第4回アーツ前橋あり方検討委員会議事録

令和3年9月30日（木）14時から
前橋市役所11階南会議室
（オンライン併用）

1 開会

【事務局（徳野副館長）】

第4回アーツ前橋あり方検討委員会を開催させていただきます。

全体の進行は、私アーツ前橋副館長の徳野が務めさせていただきます。

冒頭に会議公開に関するご説明をさせていただきます。本検討委員会は、前橋市審議会討論会議の公開に関する要領に基づき、また前橋市情報公開条例116条の規定により公開させていただきますのでご了承ください。

また、本日の会議開催は傍聴者定員を10名とするとともに、記者席を設けております。会議録を作成し、前橋市のホームページで公開することになりますのでご了承ください。

今回の会議開催にあたり前回同様オンライン併用となっており、小山委員さんがオンライン参加となっております。小池委員、野本委員、萩原委員さんからは欠席のご連絡をいただいておりますが、事前に意見をいただいておりますので、会議中、紹介させていただきたいと思っています。

また、前回の会議は、新型コロナウイルス感染症拡大の状況が一番厳しいタイミングだったため傍聴者なしとし、オンライン開催とさせていただいたところでしたが、その際、動画等を配信する検討も話題なりましたが、最終的な結果、従来どおり議事録をホームページで公開することとしました。途中、委員さんには議事録の確認ありがとうございました。

今回についてもできるだけ早くホームページで公開できるようにしたいと思いますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

それでは第4回会議開催にあたり中島委員長からごあいさつをお願いします。

2 あいさつ

【中島委員長】

第4回目（の会議）になりました。第1回から3回までアーツ前橋の紛失案件に関するの検証と事実確認、共有、その他ガバナンスとコンプライアンスというところまでを3回（の会議を）使って協議してきました。

あり方検討委員会という趣旨からいうと「さあこれからアーツ前橋をどうしていくんだ」「どうしたいのか」というそこを僕は本来的には議論すべきと考

えたので、ある意味、今日から本格的な論戦に入って「前橋市民が納得できる施設を手に入れるためにはどうしたらいいか」という議論をみなさんのお知恵を拝借しながら進めていけるのかなと考えています。

前回、前々回も申し上げたのですが、SNSの発達で、さまざまな意見をお持ちになっている方の意見が、リアルタイムに手に取るように把握できるというのは、ある意味良いようで殺伐とした雰囲気にもなるし、創造的な希望に満ちた話題も溢れているのですが、今日、私が考えるポイントとしては、アーツ前橋、前橋市民が支えるアーツ前橋が今後どのようなようになっていけばいいのか、みなさんの専門的な見地をお借りして、その辺の議論を進めていければと考えています。

効率的な時間を使って、建設的な意見を詰めたいと思っておりますので、最後までよろしくお願いします。

【事務局（徳野副館長）】

中島委員長ありがとうございました。

それでは議事に入る前に資料の確認をさせていただきたいと思います。

（資料確認）

【事務局（徳野副館長）】

それでは、具体的な議事に入る前に、委員長にもご了承いただいているところですが、1点目は前回（の会議）、島委員から「アーツ前橋としてすでに取り組んだことがあれば（お示しして欲しい）」と宿題でいただいた部分になります。

これまで館で取り組んだことですが、アーツ前橋における作品管理ということで、「収蔵作品の確認作業」として「実見確認と台帳確認」、「令和3年6～7月」と（資料には）書いてありますが6月のうちに終了しているところです。

それから、「学芸業務」については、「職責と実績に応じた主席学芸員の配置」ということと、任期付き学芸員の期限（となる）タイミングがあったのですが、「研修機会の受講機会の確保」として今年度に入り新たにに取り組んでいます。

この後の対応とすると、「収蔵作品の確認」後の作業として「寄託や借用作品の確認」。それから会議の中でもご意見をいただいている「作品収蔵管理の手続きチェックマニュアル」作成。アーツとしても考えていることを、みなさんのご意見を踏まえて作ること。

それから、すぐにできないこともあるかもしれませんが、あり方検討委員会の提言も含め、人事管理、学芸とか事務の管理職の設置、正規職員をもう少

し確保するとか、そうした総務部の調整は今後の対応になると思っています。こうしたことをアーツの方で行いました。

もう1点は、前回の会議中、今回の紛失事案の中で、文化スポーツ観光部としての初動対応の問題、それから組織としてどう共有し、市の（組織の）中で2500人くらい（職員が在職し）いろいろな部署がある中で、どのように組織的な対応をするかの課題を冒頭私が話したところもありましたが、このあたりのところを、一般的な企業であればどのように取り組むのか、この委員会に危機管理対応という視点で入っていただいている渡辺副委員長さんに簡単にご紹介いただきたいと思っております。

【渡辺副委員長】

「一般の企業で」というお話ではありましたが、企業によらずということで、少しお話をさせていただこうと思います。

これから先はあり方の話になっていきますが、前回までのお話の中で「なぜ事案が起こったのか」ということについて、いろいろお話がありましたが、私の立場で、一言で言わせていただくと、「誰もボールを持っていなかったから、謎の落球事故が起こったのだ」ということだと思っています。

施設運営に限らず普通の仕事でもそうですが、特に物の管理であったり、何か物を「AからBに運ぶ」とか「保管する」とか「そこからまた出す」とか「使う」とかを複数の人でそれにあたる時には、「誰が、今このフェーズについて責任を持ってやっているのか」を明らかにしなければいけません。そして、翌日、あるいは翌週、その「責任を持ってやっている」人から次の工程の人に仕事に移るとすれば、「移った人がボールを持っている」ということになります。「そのボールを誰が持っていて、今回は誰に渡すのか渡さなかったのか」ということを、ひとつひとつの工程で明らかにしていけば、ボールが無くなることはないです。落ちても拾えると思います。

今回はボールが無いのです。見つからないのですね。誰がボールを持っていたのかがさっぱり分からない。現場でも誰が持っていたのか分からないし、私がお聞きしている限りでは、市役所の中でも誰が持っていたのか分からない。これは、はっきり申し上げれば「たらいまわし」で、くるくるやっているうちにボールが蒸発したような、どこかに消えてしまったような話なのです。

人様のものを預かっている、あるいは重要なものを生産して、途中工程のものとして保管しているような時に、無くすということはありません。旧二中の倉庫の中で運び入れたものは、誰が責任を持ってウォッチしているのか。大掃除があつて捨てるかもしれないという時に、誰がそのことについて、

関係している部署や現場の作業の方に、「これ、外しておいて下さい」とか言うのか。小さな話なのですが、それをみんなで確認するなり、もしくは前回のボールを持っていた人が「今回はあなたね」と言うなり、館長なり副館長なりが、「これはこの人がボール持っていることにしているから。みんな、じゃあ頼むよ」ということを一言だけ言っておけば、その人はボールを持っているという認識で仕事するのです。

はっきり申し上げて、お役所仕事のすごく悪いところが凝縮されたような案件だと思っております。

こういうことは、「アーツ前橋の今後のあり方とかリスクマネジメント」ということももちろんそうですが、これを機会に、前橋市のいろいろな組織、スポーツもあるでしょうし、文化もあるでしょうし、福祉もあるでしょうし、いろいろなところがあると思いますが、二度とこういうことが起こらないように、本局、市役所の本庁と、それから市役所から出て各拠点をマネジメントされている方、拠点でプロパーとしてマネジメントされている方たちが、このボールの在りかについて明らかにしておくことが最も大事なので、そこをまずきちんとやらなければならない。

メンバーの方々にも同じ価値観を共有するのは大切なので、それを日頃の業務の中で癖をつけていけば、別に難しい話でも何でもなく簡単にできることだと思います。

「リスクマネジメント」といっても、何か有事があった際、僕らがやることは、まず、今これはどこで発生しているのかを明らかにすることです。そして火事、事故、事件などで、その現場に一番近いところで、「その情報を一番持っていて取り仕切らなければいけない人は誰なんだ」ということをはっきりさせます。

その上で、会社全体として対応しなければいけないこととなれば総務部、人の問題であれば人事部、お金の問題であれば経理部、契約問題であれば法務部というところが関与するわけですが、例えば、今回は人の問題なので、「一回これを人事部に預けるから、一週間後のミーティングでこの問題をどういう扱えばいいのかを人事部長なり人事課長が球を預かってくれ」と言って、3人4人5人のメンバーの総意として人事部にボールを預ける。

預かった人事部は約束の期間までにどうすればいいかというボールを持って、次のミーティングで「人の問題はこういうことです。ついては所轄、監督官庁に相談をして対処しなければいけないし、場合によっては、人の問題なので裁判になるかもしれない」ということに発展すれば、それは「もう一度総務部、法律的な問題は法務部ということで球を2つに分けるので、それぞれが0.5ずつ球を預かって、一週間後のミーティングにその球に対する回答を持ってく

る」ということを終わり際に確認し散会する。

それで、再度集まった時には、その球は誰が持っているかを確認した上で、その球の持ち主から次の工程のスタートを切る。

非常に簡単なことなのですが、この基本的なことが少しうやむやだったと私には思えてなりません。

今後のあり方についても参考にさせていただければと思います。

少しだけお話をさせていただきました。

【事務局（徳野副館長）】

ありがとうございました。これはアーツの中に（事案のフェーズが）あった時、また、組織的に対応しなくてはならない次のフェーズに移った時にしても、すごく参考になる重要な意識とっておりますので、この件をアーツの中だけではなく、今後前橋市としてやっていくときに、きちんと職員全員が肝に銘じていきたいと思っています。ありがとうございました。

それでは、今日のもともとの議題であった「議題1・2」に入っていきたいと思っています。議事については進行を委員長の方をお願いしたいと思います。

3 議事

議題1 今後のアーツ前橋に向けた意見交換

【中島委員長】

それでは、意見書を事前に頂戴していますので、前回と同じように順番に。

【事務局（徳野副館長）】

全体像とすると昨日（事前意見をメールで各委員に）展開させていただきましたが、これまでの意見交換の中でも、第1回（委員会）だったと思いますが、中村委員から「最初のコンセプトやプログラムについて、基本構想、基本計画、運営検討委員会と長い時間を議論してきた」という話もあったり、今回の（事前意見の）中にもそうしたことが委員さんからあったり、大変多くの方が時間をかけて作り上げたものだったということ（の意見）。

それから「3つのコンセプト」をアーツ前橋は掲げてきましたが、「創造的であること」「共有すること」「対話的であること」と大切な要素が盛り込まれていた、これはとても誇りあるものではないか。アーツ前橋が街なかにあって「繋がる美術館」というものを大切にしてきた。これは過去の展覧会にも館外事業にも見られ、今回の（事前）意見や過去3回の検証でもあったと思います。

そうしたアーツ前橋を中心的なものとして、若い方の力をいただいたり、今

までにはない展覧会やジャンルを超えた作家さん、プロジェクト、地域のアートスペースとかが結びついてきたりしたのではないか。

そうしたものが今回の意見全体であったと思います。

ただし、この3つのコンセプトから外れていた部分があったのか、それとも無かったのか。そうしたことを振り返った方が良いのではないか、という意見もあったと思います。

そして、こうしたコンセプトは、開館10年に満たない中で見直す段階なのか、そういったこと（意見）もあったと思います。

事業内容は美術業界から一定の高い評価を得ている。その一方で市民がどれだけ理解してきたかという投げかけがあり、入館者数がどうだったのかという課題もあったかと思っています。

そして、館外事業の成果はあるけれど、手広くしすぎた部分があるのではないか、足元が揺らいじゃいけないのではないか。業務量も含め学芸員の待遇をきちんとした方が良いのではないか。予算やそうしたことがあったと思います。

そうした中、それぞれの委員さんから、もう少し深く掘り下げたり、今回いただいた意見も含めて、（意見交換を）展開いただけたらと思います。

参考として資料をパワーポイントで（用意しました）。

最初の会議で「作品紛失事案で明らかになった問題の三層構造」があったかと思いますが、「中心的なもの」「その周りにあるもの」「一番外にあるもの」として、「作品管理の問題」や「マネジメントの問題」の提示をさせていただいたと思います。

2つ目の「マネジメント」上で、人的リソースを超えた事業展開で溢れたところがなかったか、それから（3つ目の）公立美術館として行政の認識が少し足らなかったのではという核になる部分。そこをしっかりと見つめ直すことが「今後のアーツ前橋」に繋がることと思いますので、三層（構造の課題）の中で一番核のところが今回（の意見交換）という認識を持って議論いただけたらと思います。

【中島委員長】

それでは、前回も同じ仕組みで進めたのですが、青野館長から今後に向けた意見ということでお答えいただけたらと思います。

【青野委員】

「今後のアーツ前橋に向けて」につきましては、これまでの議論の中でも随分出てきております。

かなり重複する部分があると思うのですが、みなさまから寄せられた今回の

宿題、先程持参しました資料にも書かせていただきましたが、最初の「3つのコンセプト」。これは私も変更する必要は全くないと思っています。

その「3つのコンセプト」をきちんとこれからも踏襲していく。「何が市民から求められているのか」。そこにもう一回立ち返って、初めの一步からまた積み上げていくしかないのではないかと考える次第です。

【島委員】

私も青野さんと一緒に、3回議論を重ねてきていますので、「適切な作品の管理」とか「3つのコンセプト」。これ自体は変更する必要はないと僕も思っております。

これをどう継続して展開していくかが重要になりますので、私が書きましたメモ（資料）を後で読んでいただければと思いますが、差し迫っては、来年度の予算をある程度適切に確保していただかないと、ここで提言しても何もできないことになりますので、そうしたことはぜひお願いしたいと思っております。

それから、学芸員の方の待遇の改善と質の向上、それについてぜひ対応いただきたいと思っております。

業務量はどれくらいの量だったのか、非常に活発な活動をこの数年間続けてこられていましたので、過重な負担になっていたのか、少し事業の数を減らして調整する、展覧会の会期を少し長めにとるとか、いろんな形で提言できる方法がありますので、そういった点もお考えいただきたいと思っております。

それから、2023年度に開館10周年を迎えますが、来年度がその準備の前の年になりますので、もちろん10周年だから急に予算が大きく付くわけではないと思いますが、そうした意味でも、予算的にも10周年を念頭において、次々年度の準備を何か進めていただけたら良いかなと思います。

冒頭、事務局から、美術館活動の再開に向けた説明があった中で、コレクションの棚卸作業が6月から1か月くらいかけて行われたことにより、今回のコレクション展、私も拝見いたしましたが、小さいスペースではありますが、この館のコレクション活動がこういう形で進められてきたということが解りましたので、それをさらに新たに下のスペース（地下ギャラリー）を使って大きく展開していただければ良いかなと感じました。

【中島委員長】

ありがとうございます。島委員から予算の件がでましたので、この件についての補足を事務局からしていただければと思うのですが。

【事務局（徳野副館長）】

資料を取りまとめている中で気付いたところなのですが、紛失調査委員会の提言で「作品を収蔵する意義」が大切なのではないかということがあったのですが、予算が厳しい中、収蔵品（美術品購入）の予算がゼロになってしまったのですが、「収蔵品を続けていく美術館の意義」について、簡単に島委員さんから補足いただけたらと思ったのですが。

【島委員】

以前の書類に少し書きましたが、展覧会活動と美術品の収集活動は、実は美術館活動の両輪でして、高額な作品を買うために収集予算を付ける必要はないですね。むしろ普段の展覧会活動をやって、これから活躍していくアーティスト、グループ展でも個展でも良いのですが、国際的に活動している日本のアーティストを（展覧会活動で）紹介したときに、その中からいくつかの作品がここ（美術館）に残っていくことが重要なのですね。

あるいは「アーティスト・イン・レジデンス」というような形で滞在して、前橋の歴史だったり、前橋で発見したいろいろな資料を使って、（滞在制作の成果として）いろいろな映像作品だったりする場合がありますね。

そういったものを成果として美術館が所蔵していくと、展覧会の歴史、あるいはレジデンスの歴史にもなりますし、前橋を振り返る一つの参照点にもなるという意義があるのですね。そういった作品はそれほど高額なものでも必ずしもないので、これまで1000万円くらい（の収蔵予算）で継続的に収蔵されてきた。

一方で、歴史的な、例えば洋画家で、明治から現代にかけて活躍されてきた方々もまだいらっしゃると思いますので、そうした発掘をして、作家がお持ちの、あるいはご遺族がお持ちの作品をリサーチしてやっていくことも非常に重要です。

そういった作品は非常に高値で取引されるようなタイプのものでは必ずしもないので、継続的に収集することでこれまで集めてこられた数百点の作品をさらに充実させることができますし、将来的なコレクションをより魅力的なものにできます。

予算がないから収蔵品の予算を削って展覧会だけやりなさいと言いますと、展覧会をやってもその痕跡が残らなくなってしまいます。どこの美術館でも両輪として位置づけておりますので、仮に予算が少なくても、収集のための予算は取っていただきたいと思います。

【事務局（徳野副館長）】

ありがとうございます。それも貴重な「今後のアーツ前橋」というところに

なると思いましたので事務局としても参考になりました。

【中島委員長】

順番に中村さんお願いします。

【中村委員】

今後の美術館に向けては、具体的で、実務的なことについて、美術の専門家の皆さんからいろいろお話があったので、私自身とても勉強になりました。私自身が今回提出した文書は、「今後のアーツ」とか「館長の選任」というものを考えたとき、何か足りないような気がして、それは再三申し上げてきた「アーツ前橋が生まれた時」というのは、市民の皆さんのいろいろな「熱」や「熱さ」を介在して生まれてきた部分があると思っています。

それだけで生まれてきたわけではないのですが、その介在してきた部分がものすごく大きい施設だったと思っているものですから、今、ある意味、存続の危機に瀕しているのだったら、もう一度そこに向けて開いて、そういう場を作るのもありなのではないかと思いました。

具体的に何をするかというと、再三皆さんの中からも「3つのコンセプト良かったよね」「これやっぱり続けていくべきだよ」という話があるのですが、他にも、例えば野本さんや、行政の方の田中さん、小坂さんから「本当にそれがきちんと浸透してきているのか」とか、それが「意味あることだったのか」という検証を、ここ（委員会）の中でやるだけではなく、もう一度市民に、それを問いかけてもらえないかと私自身は考えています。

具体的にその「市民会議」というものがどのレベルのものなのかもまた検討が必要かと思えます。

「検討委員会」のような、市民でもある程度専門的な知識を持っている人でやるのか、もしくは開館3年前から始まった「プレイベント」のように、一般の楽しんでいただける子どもやお年寄り含めてのレベルでやるのか、もしくは検討委員会を経て実務につなげていくための会議（「文化推進会議」）というのもあったのですが、そういうレベルにするのか、検討はいろいろ必要かと思うのですが、できれば前橋市民をもう一度信じていただき、そこまで（場を）開いて、「今後のアーツ」や「館長の選任」を）検討することはできないのかというのが私からの提案です。

【中島委員長】

ありがとうございます。そのまま続いて金井さん。

【金井委員】

僕は、この会においてできるだけ具体的なことをお話ししたいと思っておりますが、そうしないと、あと何回ですかね、何もならないと思います。

メールで質問を受けた内容で、最初は「これから今後市民に親しまれる美術館になるためには」という設問があったのですが、僕は二つ出しました。

一つは、館の館長、学芸員、副館長、全てが来てくださる人達のために働くということが今まで果たしてあったらどうか。それがこの3回聞いていて少し不安になりました。

僕が言ったように（資料に）書いてあるのですが、美術館というのは最高のサービス施設だと思っているのです。だから来てくださる方を喜ばせて帰っていただきたい。そのためには館全体がやらなくてはならなくて、館長といえギャラリーに出てきて、来てくださる方とお話して、お友達になるというか馴染みになるくらいの気持ち。

事務方の人だってそうです。2階（の事務室）にいて事務やっているだけではだめだと。学芸員や館長に任せているのではなく、みんながギャラリーに出て、来てくださる方とお話する。解説するとか、説明とか、お友達になってあげれば、もっと親しまれる館になると思うのですけれども。

人に任せない。館を良くするために自分は何ができるか。書類を作ればいいってもんじゃないのですよね。実際に外に出て学ぶということです。

それから先程、いろいろな方が「3つのコンセプト」についてお話がありました。それについて僕も考えたのです。確かに非常に良いスローガンです。ただし、それが今回、本当にこの7年間で出来てきたのかどうか非常に疑問のあるところなのです。

まず「創造的であること」。これは市民の方たちが創造的な心を育てて、市民の中に芸術や文化を、なんというか中身にしてもらえるところが一番だと思うのですが、作家や学芸員たちの独りよがりの満足によって、「作家は創造的であればいいんだ」という上から目線で見ていることはなかったか。そんなことを僕も少し反省したのですが思いました。

次に「みんなに共有すること」は、本当に市民が気楽に集まってくれるような場であったかどうか。これもやはり一段上から見たような「教えてやる」という気持ちではだめだと思うのです。そういうことを思いました。それから、集まってくる人。それがいつもの顔ぶれ。いつもいるのだけれども、それだけということではなかったらどうか。

それからもう一つは「対話的であること」というところなのですが、どんな対話があったらどうか。ここが非常に反省すべき点であるかなと思いました。

もう少しかかるのですが良いですか。僕の経験をお話したいのですが良いで

すか。

【中島委員長】

この話であれば。

【金井委員】

以前の経験から見た、続くことなのですが、今年、東北である展覧会を企画したのですね。人口10,000人にも満たない町なのですが、津波で100人以上亡くなっている町なのです。

そういうところで始めたので、みんな素人なものですから、全国にその展覧会を広めようと思い、各美術館とかそういうところにポスターとかを送りたかった。それでその（発送）リストが欲しかったのですね。

それで、一番身近だし2017年には僕が委員長をやった展覧会のその時に出されたリストがあったら欲しいと思ったのですよね。それをアーツに声かけたら断られちゃったのですよ。

それはいいでしょう。ただ、僕がそこで思ったのは「はいダメです」で終わっちゃうのです。「対話的である」ということであれば、そのような困った人がいるのであれば、「どうしたら解決できるでしょうか」という対話が欲しかったのです。「それはできません、じゃあさよなら」で終わっちゃうのですよね。そこから対話が始まるのです。そういう「創造的なこと」。それから「共有すること」「対話ということ」。この3つは単なるお飾りではいけないですよね。そこを今回感じました。よろしくお願いします。

【中島委員長】

大橋さんお願いします。

【大橋委員】

今後に向けての検討ということなのですが、（資料に）書いてあるとおり、全体については何度も出ているとおりコンセプトの話ですので省略したいと思います。

「3つのコンセプト」と共に、「つながる美術館、成長する美術館、文化を創る美術館」このコンセプトに絡むことだと思いますが、こちらが大変重要なキーワードだと思いますので、いずれにしても開館10年にも満たないこの時期で、市民みんなで作ってあげてきた基本的な考えは大切にしていってほしい、これを変更する必要はない、と私は思っています。

それと島さんも触れておりましたが、「アーティスト・イン・レジデンス」、

これは商店街とも深い関わりのある事業です。滞在する先が商店街の中という環境にあるものですから、商店街のいろいろな人と滞在するアーティストが日常を通じて非常に仲良くなり、商店街のメンバーとも繋がりができました。

私も含めて（商店街の）メンバーは、現代アートは全然わからなくて無縁の世界だったのですが、海外のアーティストとか、言葉が通じる、通じないもありますが、一緒にご飯を食べて飲みながら話をすると、その人間を理解することができるわけで、彼らが何をしようとしているかがわかってくる。

いろいろと変わった人もいて、総社神社にオウムの群れを調査して、それが何で現代アートなのかは未だによくわからないのですが、そういう方々ともお付き合いできたのは商店街にとって非常に得をしてきたと思います。

私も本来そういう雰囲気が大変好きなもので、開館直後のころから、海外アーティストを中心に、前橋に滞在すると私の家で必ず一回はホームパーティーをやって、学芸員や地域の人も呼んで、一緒にわいわいやるのを続けて来ましたので、「アーティスト・イン・レジデンス」は非常に価値のある事業で、アーツ前橋だけじゃなく、前橋市、前橋のまちなかが世界と繋がる、そういうことが実現できた非常に良い事業だったので、コロナの影響で中断していますが、ぜひまた予算を取ってこの事業は復活して欲しい。また、これを地域として支えていきたいと私自身は思っています。

また、「前橋の美術」という展覧会がありました。メンバーである金井さんも相当深く関わっていただき、素晴らしい企画をいつもやっていただいています。2020年、昨年は「前橋の美術—トナリのビジュツ—」という副題をつけて開催されました。

これは、特に美術館で終わりにしないで、街の中ともいろいろ繋がっていかうということで、私の店は、かつて「鈴木ストアギャラリー」というのをやっていたものですから、過去の思い出を掘り起こそうということで、今、倉庫になっているところを臨時の展示会場にいただき、群馬大学の喜多村先生に見ていただいて、大変思い出深い事業もいっぱいあるのですが、これは素晴らしいつくり方をされていて、こういう「前橋の美術」のような、市民の皆さんが、展覧会を主催する方々自身がいろいろアイデアを出し、アーツ前橋と協調しながらコンセプトに沿った形で展覧会を開催していくのは非常に素晴らしい。

私も身近な存在として、商店街の中に絵を描くものもいて、私がメンバーということを知って、前橋の民間の美術の展覧会等も身近に開催できるようになったら良いと言っていました。

何でもかんでもやるのは乱暴で、アーツ前橋のコンセプトに沿った形でというのが条件になるとは思いますが、野本さんのご指摘のとおり、来館者数も開館当初から思ったほど全然伸びてきておりません。ごく一部の人の美術館にな

ってしまっているのかなと思いますので、もっと身近に感じてもらえるような、そして市民自ら企画から参加できるような、そうしたサポートも増やしながらアーツ前橋の来館者数をボトムアップしていく、そういう部分も必要なのではないかと思います。

それと、前橋まちなかは「map」とか「ya-gins」とか、それと「マエバシワークス」とか、現代アートの前橋の作家さんたち自ら関わってつくっている美術館、展示会場、アートスペースがあります。こういったこともアーツ前橋が成功してきた、力を発揮できた一つの要因でないかと思います。

こうした「地域のアートとの連携」、それを大事にして欲しいと思います。

それと、触れていませんでしたが、アーツ前橋の中で相当努力していただいて、商店街の我々がアーツ前橋の素晴らしさを伝えて欲しいということを常にお願ひされていまして、アーツ前橋の企画展があるときには必ず商店街関係者を招待していただいて、商店街関係者向けに学芸員の解説付きのアーツツアーという機会を毎回つくっていただきました。これも大変な手間だったと思いますが、こうした点も今後も大事にしていただければ大変ありがたいと思います。

【中島委員長】

続いて小山さんお願いします。

【小山委員】

今の話すごく面白かったです。

僕も意見書に書いたのですが、前館長のやってきたこと自体は内容的にすごく面白いと思っていて、先程、渡辺委員が言ったようないろいろな管理とまではいきませんが、常識的な美術館を運営していくことが大事だと思うので、それを基本にしてやっていったほうが良いと思うのですが、管理ということを強くしすぎると嫌だなというのは僕も（資料に）書いて、この間までは館長も含めて学芸のチームだったと思うのですが、その人たちがやろうとしていることができる形、「3つのコンセプト」を基に、もちろん市民の方といろいろな話すも大事だと思うし、地元のアーティストと話すことも大事だと思うのですが、その人たちがやっていける雰囲気、現場をつくっていくことが大事だと思っていて、今、島館長がおりますが、国の美術館はとても大きなことをやらなければならないと思うのですが、前橋という市の美術館で、他の県や都、国とは違う美術館をやっていかななくてはならない。やっていくことの方が有意義だと思うのです。

逆にアーツ前橋がやることがあると思うので、乱暴な言い方かもしれないですが、ちょっと間違いを起こしたら今回のように怒られつつ、本当はやっちゃ

いけないですが、突っ走っていくような姿勢ができるのが嬉しいというか面白いなと思ったり、学芸員も職員もそうだし、アーティストもそういった人達が繋がって、市民や県民とか国民とかを考えたとき、どれほどの共有が必要なかわからないですが、この会議の中で何%という数字が出ていたと思います。それが少なくとも美術に興味を持ってくれればという話をしていたと思うのですが、そういったように全員に全てあまねく共有されたりとか、楽しんでもらう、盛り上がる現場感みたいなものが出てくるのが、どうにかしてできないかが僕の願いです。

【中島委員長】

ありがとうございます。続いて、欠席している小池さんからも意見が出されているので代読をお願いします。

【事務局（徳野副館長）】

それでは、欠席の小池委員さんと野本委員さんから意見を頂いているので、（資料を）見ていただきながらポイントを読み上げます。

（小池委員・野本委員提出資料を読み上げ）

読み上げたところですが、「アーツ前橋運営体制」という資料を以前に出させていただいたかと思いますが、アーツ前橋に学芸と事務の職員がいて、外のアーティストとも関わりがある中で、いつも市民企画があるわけではないですが、今日こちらに金井委員さんにも来ていただいておりますが、「前橋の美術実行委員会」という市民企画も3年に1度実施している。

作品収蔵に関しては収蔵美術品専門委員会で行っている。

そして野本さんから評価についてありましたが、「アーツ前橋運営評議会」があり、ここへ企画提示や目標設定を提示し、終わった後に評価を受けるような運営体制がありました。これまでも同じように「もうちょっと数（入館者）を上げたほうが良いのではないか」とか（評議会の意見）をどの程度、翌年度予算に反映できていたか（という課題があります）。

それから中村委員さんからもあった「どのように市民の意見を吸い上げるか」では、「もっと若い人の意見が良いのではないか」とか「より多くの市民の意見を取り入れたほうが良いのではないか」というのもあるので、評議会の委員構成とかもあるかと思えます。

野本さんや今回いただいた委員意見を参考に、次の体制の検討もあわせて考える必要があると思ったところです。

そして、行政からの小坂委員と田中委員につなぐ前に、金井委員さんから先ほどお話いただいたところで、僕自身の反省も含めてですが、今回の事案は、アーツ前橋が掲げてきた「対話」、「共有」、「創造」を大切に、事案が起こったとき関係者で良く対話し、共有し、どうしていくかを話していくことを何より大事にしなくちゃいけない。

芸術文化の事業展開とは別かもしれないけれども、そうしたこと（対話・共有・創造）を丁寧にやるのが、作品管理やコンプライアンスでも大事だと思っておりましたが、先ほど（金井委員さんから）ご指摘いただいたところは、私も関わっていることでしたが、きちんと金井委員さんや地域の作家さんとも丁寧に話をしていくの（大切さ）は改めて感じたところでしたので、私自身の反省を含めてやっていきたいと思っています。

【中島委員長】

渡辺委員さん。順番で。

【渡辺委員】

私は、美術の専門でも美術館の専門家でも経験もないのでそのことは書きませんでした。が、（開館から）8年。「文化は続けてなんぼ」だと思いますので、50年とか100年とか続けていくことが大事だと思います。

今回のことは、初期の段階での経験と失敗を積み重ねるためのスタディーだったと50年後くらいに言えるのかもしれないと思います。ですからこれは乗り越えていかななくてはならない。

ということで、サントリーホールができたときのエピソードを書いてお送りしましたので、後でお読みいただければと思います。

私は、ここでは危機管理の専門家みたいな体なのですが、お客さんを集めるとか、新製品がたくさん売れるとか、イベントにたくさん人を呼ぶとか、そういう普通のPRもやっております。「市民に愛されるアーツ」を考えていくとすれば、ソーシャルの時代なのでいろいろやることもあると思います。

人を集めたり物をたくさん売るときに大事なことが2つあって、1つは「コアユーザーを大事にすること」と、もう一つは「エントリーユーザーという次のお客さん、新しいお客さんを大事にすること。」

どこでも全く同じなので、アーツでもこれからまだまだやるのがたくさんあると思って見ておりました。

今の館が古くなって取り壊しの問題が出てきたときに「どうする？出ていく？移る？」というところまでいられれば、別のところに移ってもまた協力してアーツはやっていけると思いますし、小学生の頃に来てくれた人がお父さん

お母さんになって、子供の頃に撮ってもらった写真がずっとロビーに飾ってあるのを見るみたいなのがあると素敵だなと思いました。

前橋も長く続いていくし、文化は長く続くどころじゃなく、ずっと創造され続けていくし、市民に愛され続けていく。そういうことで育まれていくので、ここのメンバーがいなくなって、新しいメンバーの人たちに替わってもずっとずっと在り続ける、ということが大事かなと思います。

【中島委員長】

続いて、小坂課長。

【小坂委員】

私は感覚的に書いてしまったので、(市民アンケート結果から)野本先生が分析していただいたのでありがたいと思いますが、アーツ前橋、私も行政職なので知ってはいるのですが、市民にとってどうなのか。市民の方は知らないという方も多いのではないかと思います。名前は聞いたことがあるけど場所はわからないとか、そういう部分があるかなと。

まちなかに来る人が少ないとか良く分析していただいて、まずは職員もそうなのですが、「市民は知っているだろう」「こういう事業があるのを知っているだろう」と思いがちなところがあると思うので、そういうところをもう一度振り返って、(開館から)8年経っているけど、「みんなもしかしたら知らない」というのを前提に、まずは施設の周知(が必要)なのかなと。

そういう中で「今後のアーツ前橋」(へのアイデア)ということで、(県立)近代美術館とタイアップして、共通の入場券のようなものを発行してみたり、白井屋ホテルなどもできたので、例えば今日この部屋が空いているのであれば、また、偶然入替があって(目的のものが)見ることができる部屋がある。その日に行ってみなければわからないという楽しみなものがあったり、そういう工夫でまずは施設がどこにあるのか周知をしていただきたいと。

本当にやっていたことは素晴らしいことと私は思っていますし、評価も非常に高い部分もあります。行政職もそうですし学芸員の方もわかっていると思っているけれども市民には届いていない。

渡辺委員さんが子供のときに、という話をしたので、現代美術について、どの程度のものを学校で教えているのかわからないけれども、例えば中学1年生とか機会を設け美術館を見に行くようにする。教育委員会とタイアップして、アーツ前橋に施設見学に行く、というように市民が関われるような思い出を作りながら、(1学級)30人いる子のうち何人がそう(大人になって、懐かしく)思うのかわからないですが、そういう努力も必要になってくるかなと思います。

【中島委員長】

続いて田中さん。

【田中委員】

短めなのですが、「アーツ前橋は誰のおかげで存続できているのか」という意識を持つのが大切だと思います。商店街の周辺の人たち、作品の所有者、作家、その美術館。そういった人たちのおかげで、理解で、活動できている。こういった意識は以前から持っていたと思うのですが改めて意識する。

今後は、地域との関わりを引き続き持って、地域の課題だとか発見とか、解決に向けた積極的に行動していく。そうあって欲しいと思います。

【中島委員長】

概ねほぼ全員の意見が出そろったところで、本質的なところをまとめていなくてはならない自分の立場が重圧でプレッシャーであるのですが。

8年前にアーツ前橋の運営検討委員会という設置がなされて、アーツ前橋の基本をつくったチャーターメンバーが今日、僕を含めて、中村さん、金井さんがいるのですが、以来8年間、委員長という形で、アーツ前橋という形でリリースさせていただいた関係で、ことあるごとに私のところにいろいろな意見が届くようになりました。

もちろん高い評価もあれば、非常に聞きにくい、胸が締め付けられるような意見も聞き続けてきております。

概ね、皆さんの意見を聞くと、従来どおりの現代アートを扱った施設を継続という意見であると相対的に見て取れるのですが、この先、今までと同じような意見を聞くには、私は耐えません。もう嫌です。

先ほど、小山さんが「ぶっとんだ施設を前橋市民が支えているという仕組みはカッコいいよね」という話をなされました。

確かに、断片的にその部分だけを見れば、その業界の全国に発信する内容としては、ソースとしてすごくカッコいいですね。

でもその裏で、係数の話、一体何人の市民が関わるかという話があったと思うのですが、2%の市民が何らかの形で関わればその企画は大成功である、前橋は33万人なのでその2%というとなら5~6,000人が目を向けてくればその企画は成功である、という数値を聞いたことがあります。

その理論からいってとしても、ネガティブな意見は比較的声の大きい人から寄せられます。それをどう前橋市民が許容し、発展的に館を支える仕組みを創れるのか。7年間ずっと僕の頭の中をよぎってやまない。

それが実現できていない中でこういう事案が発生して、アーツ前橋の今後のあり方について検討しようという席についているのも因果な話だなと思っています。

前橋市民である大橋さんや金井さん、市の行政職員の方たちもそうですが、概ね現代アートを扱った従来どおりのアーツ前橋を、発展的に支えていくという総合的な意見であろうと思うのですが、その覚悟が前橋市民にあるかどうか。

かつ、声の大きいネガティブな意見に何らかの形できちんと発信ができて、納得してもらおうということではないと思うのですね。アーツ前橋がそういう声の大きなネガティブな意見を発する人たちに対して「どう理解を求めていくか」に懸かっているのだと思います。

前橋市民である我々にそこを支える覚悟があるかどうか、そこを僕はもう一回、皆さんの意志を確認しておきたい。

特に先ほど商店街というお話をなさっていて、比較的いろいろな情報が入り、かつアーツ前橋取り巻きの人たちと交流のある大橋さんの意見をぜひ聞きたいと思います。ネガティブな声の大きい人たちに対して、何をどう発信して、どう理解を求めるのか。ここを論点として、意見を期待したい。

【大橋委員】

非常に大きい問題、テーマだと思いますが、結論から言うと、商店街もそうなのですが、非常にアンダーグラウンド、2ちゃんねる系のもので前橋の商店街は特に酷評されています。

私も中島さんと同じようにそれを受け止める側の人間なのですが、私は一切無視して、前橋の商店街は、今、楽しい事象がたくさん起こっていて、「めぶく。」という合言葉を基に、白井屋ホテルができたり、商店街に行列ができる新しい店が次々とできたり、中古物件をリノベーションして若者向けの店ができたり、アートに関係する若者がそこに住まいながらやっていたり、学生専用のシェアハウスができたり、いろいろ新しいことが起こっています。

そういうプラス思考で「前橋の街はこう変わっている。こういう姿勢である」ということを語り、見せるようにしています。

それでマイナスな意見が出るならしょうがないというのが、私の基本的な姿勢で、アーツも同じように基本姿勢を変えないで欲しいと願っている一人ではありますが、これからどのような企画を出して勝負していけるのか。これは学芸員の資質に関わっていると思いますが、「アーツ前橋はこういう企画ができるね」とか、市民も「非常に身近な美術館になって前とはちょっと違うし、スタッフの対応も違うよね」というのを感じられるような、そういうプラス思考で見せていたり、受け止めたりという以外ないのではと思います。

【中島委員長】

了解です。金井さん。次、中村さんね。

【金井委員】

8年前に中島さんが委員長になって、アーツが立ち上がったと思うのですが、何年か僕は様子を見ていたのですね。

それで、皆さんもご存じのとおり、どちらかというところ、いわゆる現代美術に特化した展覧会が続いたというか、目立ったのですね。結局、入場者も芳しくなくて、委員の一人だったものとして、何かやりたいと思って、この「前橋の美術」を立ち上げたのです。

僕が館長に提案したときに、断られるかなと思ったのですが、快く受け取られたのですね。それで僕らの好きなようにやらせてもらった。

それは先程野本さんの意見の中に「多様で良質な」というところ、多様になっていなかったのではないかとありましたが、僕もちょっとそう思っています。

市営の美術館であれば、いろいろなものが紹介されていいのかなと思いつつ、「ごった煮」のようにやったのが「前橋の美術」なのです。前橋にはほかにも素晴らしい人がいっぱいいるのです。そういう人に焦点あてていくべきと思つて、そういう人であれば、市民の人たちも来るし、市民の人たちが興味あるものを紹介するという、それを住友さんに提案したのですが。

僕は、平山さんは素晴らしい写真家だと思っているのですよね。残念ながら亡くなったのですが、その人の展覧会やってくれないかと提案したことがあったのですが、それは果たせなかったのですけれども、そのように興味を掘り起こせば来てくれるところがいっぱいあるのです。

【中島委員長】

論点としては、従来どおりの現代アートを扱っているアーツ前橋を、今後も発展的に支えていく覚悟があるかどうかという、そこ。

金井さんの場合は、変えていくべきだという論調（ですか）。

【金井委員】

そうですね、ちょっと修正が必要ですね。

今のおおりのとおりだと、相変わらず来てくれる人が非常に少ないと思いますね。

【中島委員長】

中村さん、お願いします。

【中村委員】

短い時間で語れることでもないのですが「支えられるかどうか」「中村の場合はどうなのだ」と聞かれたら、小さな声で「支えます」としか言いようがないです。

大橋さんが先程から言っているとおり、前向きで語っていくしかないという、ここで生きている人間は絶望していてもしょうがないので、前向きで語っていくしかないと思うのですね。

そこ（美術館）を支えていくという市民の覚悟をどこまで信じられるのかというのもあるでしょうが、地域の場合はすごく丁寧に、大事に、デリケートに、それぞれを結んでいかないといけないと思うのです。私はプレイベントから開館までの間、アーツ前橋は（その丁寧さを）とても上手にやったと思います。

ただ、その後、形ができると、先程、渡辺さんから広報の話がありましたが、「広報、何やったの？」「PR何したの？」と問うと、「ホームページに載せました」「広報まえばしに載せました」「SNS 1回だけ情報流しました」と返事がありますが、それだけではダメでしょうと。

信頼関係を築くためには、相手に向かって、どんどん踏み込んでいかななくてはならないし、回数ももっとやっていかななくてはいけないはずで、そういう部分は足らなかったかなと思います。

私自身は、今回提出した書類（事前意見）の中で「地域と世界をつなぐ」、さっき大橋さんが「街中と世界を繋いでくれた」ということを仰っていたのですが、私自身はもう一つ、アーツ前橋は、前橋という地域のポテンシャル、見えずらかったものを見える形、こんな形で可能性があるというのを見せてくれたと思っています。

ふだんの街なかだったり、商店街を見えるようにしてくれた。また、学校教育と美術館やアートをどう結び付けるかということだったり、福祉施設、介護、医療、そういうところとの結びつきもを見せてくれた。

ぐんまや前橋の演劇も、アーツ前橋のおかげで、ある部分のポテンシャルを表に出す形にさせていただいたと思っています。地域の演劇は美術と全く違って、ほとんど表に出ることができない苦しさを持っています。どんなに質がいいものをやっても表に出ない。それをアーツ前橋には見えるようにさせていただいたというのがあります。

今後も演劇だけを大事にして欲しいと言っているわけではないです。先程のように街なかや学校教育、介護、福祉だということと結びつく。

それと同じように、ポテンシャルがあるけれども、まだ（表に）出ていないものを明らかにする、という動きはやっていける可能性があって、現代アート

でなくても良いのかもしれないけれども、我々は一度それ、見えないものを見るようにする手法を手に入れたのならば、責任を持ってやり続けていかないといけないのではないかと考えています。

それは先程渡辺さんが「これは50年、100年かかることですよ」と言ったものを、地域の人間は引き受けていかなければいけないのではないかと考えています。

そのとき、いろいろな委員さんの言葉をお借りして申し訳ないですが、島先生が仰っていたように、これまではいろいろ盛り込みすぎて、忙しくなりすぎていたのだろう。なので、先程も言ったように、地域は丁寧にゆっくり、時間をかけて調整することができる場だし、時間をかけていかなければいけない場だとも思いますので、そういう丁寧さを続けていくことで、まだ支えていける可能性はあるのではないのかなと私は考えています。

【中島委員長】

この議論をもう少し深めたいと思うのですが、これを深めることによっておのずと次期館長像というのが見えてくるような気がします。

前橋市民の意見ということでお話をさせていただいたのですが、先程「ぶつとんだ企画を矢継ぎ早にやっていたのを支えている前橋市民の覚悟」のような話を小山さんが仰っていたのですが、今の意見を聞いて、もう一度その辺のお話、意見を聞きたいと思うのですが。

【小山委員】

皆さんが話していた話でも、いろいろな体験をアーツ前橋からされているということはすごく良いことだと思うし、それを繋げていけるという可能性はすごく感じられるのですよね。

だから、アーツ前橋をまた新しく経営するっていう発想で、人を呼ぶのも、市民と繋がるというのも大事だと思いますから、そうしたことを念頭に置きながらさらにやっていくことに対し、熱意のある館長を呼ぶ、当てはめるということ、かつ市民の皆さんが協力することが出来そうな感じがするのです。

それは先程言った、前館長は仕事を詰め込みすぎて多かったので、そうしたことをきちんと管理できる人がいて、それを少なくしながら、先程、島さんが言われたように、良いバランスで展覧会とか購入とかしていける形になれば良いし、それが影響を皆さんに与えることができれば良いということを考えてましたが、そんな感じです。

【中島委員長】

そういう仕組みで市民が支えている館の事例、ご紹介できるようなのは、小山さん、どこかにありますか。青野さんも含めて。

【島委員】

前館長が以前所属していた金沢21世紀美術館。ただし、これは例外的な美術館で、一番多かった時に入館者数が年間250万人なのです。金沢の人口が47万人ですから、市の人口の5倍の人が押し寄せ、一時、観光公害に近いような感じだったのですね。

21世紀美術館の特徴で一番良かった事業が、開館の年に、金沢市内に住む小中学生4万人を全員美術館に約4か月かけて、バスもチャーターして、予算2000万円をかけて、とにかく「21世紀美術館はここにある」ということを示したのですね。

さすがにそれを毎年やるわけにもいかないの、一年お休みをして、2006年から小学校4年生3000～4000人。私が在籍していたときも毎年これを継続してやっていました。

開館の年に来た子供たちが大きくなり、学芸員ではないのですが館の職員になった人がいます。かつて見た展覧会の作品の記憶があつて。

前橋市でそれができるか別としても、いろいろな方、批判される方も確かにいらっしゃると思います。それは21世紀美術館もそうなのです。現代美術をやっている美術館は多かれ少なかれ批判の矢面に立つのですね。「島さんわけわからないよ」って。なかなか来ないのです。今いる国立国際美術館もそうなのです。

小学校4年生って一番多感な時期で、大人になっていない、少し自我が芽生えている時期なのです。子供たちと一緒にコレクションを見る、そういったことを21世紀美術館は地道に15年続けてきている。

水戸芸術館も非常にそういう取り組みをしています。アーツ前橋も、前館長も水戸芸術館のことを良くご存じですから、たぶんそこで蓄積されたものが、アーツ前橋に活かされてきた。ですからそれはやはり継続して行って、市民との対話も今後さらに展開されると思います。

先程のお話の中で、少しだけ確認しておきたいことがあります。

まず、入館者数ですが、現代美術館は基本的に人はあまり来ないのです。

例えば、広島市の現代美術館は、人口120万人で年間約12万なのです。

それから水戸芸術館も約3万人なのです。確かに前橋も33万人の人口で、3万前後ということですから、ここ（アーツ前橋）だけが入っていない訳ではないということはお理解いただければと。原美術館も多かれ少なかれ。

もちろん、例えば篠山紀信をやれば人が来るとかあります。

後は、美術館のキャパシティもありますので、もう少し来てもらいたいというのがありますが、金沢でもあまり人が来ると入場制限をしなくてはならないのです。コロナの問題で入場制限が正当化でき、中の混雑を避けられました。適切な鑑賞環境を保てるということがありました。

現代美術をやっていくということは、必ずしも多くの入場者がみられないということを最初から見込でしまうことは重要だと思います。

それから小坂委員が仰った「美術館の存在が知られていないのではないか」。これはまさにそうなのです。

国際美術館は以前、万博記念公園の中、「太陽の塔」のそばにあったのです。不便な場所、大阪市内から40～50分かかるのです。お客さんが本当に来なかったのですね。

今は、中之島という大阪の中心部に移ったのですが、国立国際美術館はどこにあるのか。大阪にあることをご存知の方も実は意外に少ない。

その意味では「アーツ前橋」は「前橋」とついているだけでも羨ましいと思います。少なくとも地名で場所が分かりますしね。

いずれにしても、美術館の存在というのは、多くの人にとっては、例えばルノアール展をやります、ゴッホ展をやりますという、企画展の名前だけで行くのです。「その美術館への親しみ」というのはなかなか生まれにくい。

そういう意味では、「今年初めてオープンするんだ」という気持ちで毎年やることが非常に重要だと思っています。

アーツ前橋の職員の方も「10年やっているから大丈夫だろう」とかそういったことは一切ないと考えて、今年あるいは来年初めてオープンする。今回良いきっかけになったので、来年の春から再出発する、今は準備期間なのだというくらいの気持ちで、美術館が再出発してもらえたら良いのではないかなと思います。

【中島委員長】

青野さん。

【青野委員】

私どもの方は、入館者数は決して多くはないのですが、それでもやはり確実に訪れてくれる地元の子供たちがいるわけですね。渋川のミュージアムアークができたのも1988年でしたが、当時は「教育普及プログラム」という言い方をして、いろんなワークショップをやったりレクチャーをやったりというイベントをずっと継続してきたのですね。

子どもたちが歩いて来られる美術館ではないので、親御さんに連れてきても

らわなければならないから大変だったのですが、それでも毎年夏に通ってくる子供たちはいたのです。「来年も来るよ」「楽しかった」と言っていくのですね。「また来てね」と手を振る（見送る）のですが、そういう子どもたちが大人になって、自分の子どもを連れてきてくれるのですね。

大学生も原美術館ができた頃は美大生しか来なかったのですが、美大生がデートで来て、その美大生が大人になって旦那さんを連れてきてくれたりするのですね。

コレクションの大事なところが、そういう何年、何十年経っても、あの美術館に行けばあの作品に会える。自分は変わっていても作品は変わらないのですね。こちら側のモチベーションが違うので見え方が変わってくる。そういう経験を直にできるのがコレクションの良いところだと思うのです。

現代美術について言えば、やはりとんがっているのです。だから、なかなかわからないと言われるのは仕方ないところで、万人が「これはいいよね」というのがあったら、それはもう現代アートではないのですね。もうとんがっていない。いわゆる大衆文化になってしまうのです。

なので、その現代芸術、同時代の表現をちゃんとフォローをしていくというのは非常に忍耐力がいることでもあります。

でも、それを少しでも多くの人たちに伝えようという誠実さは、美術館をやっていく者にとって最低限必要なものなのではないかと思います。

そして、もう一つは、子どもということから言うと、海外では小学校の頃に美術館に行ったことがある子は、大人になってからも美術館に行くというデータが取れているのですね。

やはり子供の時代に美術館の扉をあける体験をするのはとても大事なことだと思いますので、アーツ前橋にもずっと守っていただきたいと思っています。

【中島委員長】

過去7年間、手をこまねいていたわけではなくて、企画展に合わせて市所有のバスを、その地域の小学校に向けて、保護者を乗せてアーツ前橋に連れてきて、観覧してもらって送り届けるという企画をやったことがあるのです。

これは法的な障害があつて継続的なものにならなかったというのが残念なところではあるのですが、その時の感動する親子の姿を見ると非常に勇気づけられた記憶があります。

仰るとおり、ぶつとんだところをネガティブに取られて、意気消沈していると、前に進めなくなるというご指摘の通りだと思います。

【事務局（徳野副館長）】

「現代アートをやっていく覚悟」という話があったかと思うのですが、僕もアーツに来る前に、アーツ前橋って現代アートだと思っていたのですけれども、現代アートだけではなくて、前橋市がそもそも持っている収蔵作品だったりとか、地域の群馬ゆかりとか、前橋ゆかりの作品を丁寧にみている展覧会もあって、それだけではどこにでもある美術館になるので、そこで色付けをする中で、現代アートだったり、滞在制作だったり、海外との連携もやってきたので、そこも忘れずにちゃんとやっていきたいと思っているのと、「それを続けていく覚悟があるのか」については、現場として本当にこの一年、全身全霊でやってきたと思っているので、それは現場の職員としてしっかりやっていきたいと思っています。

【金井委員】

今の発言で、現代アートが「色付け」ではないと思うのですね。

【事務局（徳野副館長）】

すみません。言葉が適切でなかったというか、現代アートを「一つの核」にしてやってきた。そういったものを軸として、「地域の近現代のもの」と「現代アート」を軸にしてやってきたと思っています。

【中島委員長】

この件に関しては、後でまとめてお話したいと思います。

時間も押していますので、議題2「館長選任に向けた意見交換」に入らせていただきたいと思います。

議題2 館長選任に向けた意見交換について

【中島委員長】

概ね「現代アートを中心とした館であるべき」という意見は、相対的に多いと認識していますので、これを踏まえた上で、そうなってくると、館長像というか「現代アートを扱える方」というこの一言に尽きるわけですね。

こんなこと広すぎる。広すぎるし、先程の議題に戻るのですが、過去7年間のアーツ前橋を踏襲する仕組みでいいのかどうか、そこも含めて。

館長像というのは、おぼろげながら「現代アートを扱える方」、「市民を巻き込める方」、あるいは「子供たちを巻き込める方」というような意見で集約されるかと思うのですが、この点についてご意見があれば。

館長像というカテゴリーがどうなっているのか、島さんお話しいただけますか。

【島委員】

私が作りました資料の冒頭をご覧くださいと思います。

「館長の選定方法」というのは基本的には前橋市が主体的に考えることだと思うのですが、「どういう館長像があるのか」といった時に、要件を9つ書いています。

先程、委員長が仰られましたが、国内外の現代美術の現状と今後について見識を持っているというのが重要だと思います。

それから、アーツ前橋として、演劇、音楽、映画や文学、デザインや建築、食や環境など、他分野にも関心がある方。

あとは一般的な書き方ですが、アーツ前橋の活動方針に沿って、事業計画を適切に立案し、進捗管理できるとか、それから注目される展覧会とかコレクションの形成ですね。

それといろいろな方々と対話できる。

今回の反省に立って言えば、運営におけるリスク評価、それからコンプライアンスの徹底は、やはり盛り込むべきではないのかなと思います。

ここに書いてある文言のいくつかは、他の美術館で館長を公募するときの要項があり、それを参考にしながら記載したものです。

それから、今はいろいろな形でハラスメントというのが職場で起きやすい。これは前橋市役所でもそうだと思うのですが、そういったところを、職員、学芸員・事務系の方を問わず接するときの態度とか、職場環境全体が風通しの良いものになることがとても重要だと思いますので、そういった環境を醸成できることが重要だと思います。

最後に、これは原則として、前橋市あるいは関東圏に在住して常勤として活動できる方がいいのではないかと思います。その方がどういう条件で引き受けてくれるかによって、例えば、週に3日いらして、きちんと仕事をこなしていくということもあり得るかもしれません。

それから、年齢的に言うと、小山さんなんかは若い方を大抜擢するのが一つの案ではないかと仰いましたが、確かにヨーロッパの美術館などは35歳で館長になったりする場合もあるのですね。

あまり若い、あるいは現在働いている方との年齢差があまりありすぎると、それはそれで難しい課題もあると思いますので、40代半ば後半くらいから60歳代前半の方。それで健康な方に働いていただくのが良いと思います。

【中島委員長】

ありがとうございます。

前橋市とは協議を重ねてきたのですが、今後、法律に遵守して進めていきたいという話があります。その辺に関して、一般職の法令の話をしていただけますか。今後、前橋としては遵守してくということですよ。

【田中委員】

少し堅い話になってしまうのですが、1年前に地方公務員法という法律が改正になりました。既にいくつかの美術館では、改正に対応した動きが出ています。

例えば専門職である館長がいて、その下に事務職の副館長がいる形の公立美術館が一般的だと思うのですが、この法律改正を受けて、事務職の副館長が館長になる。それで専門職の館長が、これは美術館によって呼び方異なると思うのですが、例えば「特別館長」になるケースがあります。

理由は、先程言った地方公務員法の改正で、法律の主旨に照らし合わせると、博物館法で規定している館長の職務があるのですが、噛み砕いて言いますと、美術館であれば、美術館の業務をとりまとめて、学芸員や事務職員を監督して、美術館の任務の達成に努めるといった職務を行うのは、原則として「一般職」が適当ということなのですね。

「一般職」はどういうのかというと、事務職であろうが学芸員であろうが正規職員。あとは再任用とか嘱託職員とかそういった人が一般職です。「特別職」というのは、今までの館長が特別職だったわけですが、この「特別職」というのは「専門的な知識で助言をする」という程度なので、中心となって施設を運営していくのは「一般職」であるべきというのが法律の改正の主旨です。

それで、今回この議論では、「専門職の館長」としてはこういう人物像が望ましいというような議論で良いのかなと思います。

【中島委員長】

「全国的に」と言ったけれども、今は全国的には法律を遵守した、各館そういう動きになっているということでしょうか。

【島委員】

地域によってバラバラかと思います。統一していないかと。

専門職の館長もそれなりにいますし、行政の人が、例えばかつて教育長だった人が館長になったり、そういったところはあります。

【中島委員長】

今後の流れとしてはどうなのでしょう。

【島委員】

それは今の制度的なもの、前橋市の制度的なものにもよりますので一概に言えないですが、以前、愛知県美術館で館長やっていたときは基本的にここ（アーツ前橋）と一緒に県直営の組織だったのですね。その館のこれまでの館長の選び方は「現職である」ということ、つまり「一般職」ですね。

ですから、私も県職員として2年間勤めました。60歳になり定年で金沢に移りましたが、40代後半から50代の方が入った方が、正規職員としてきちんと位置付けられますので、本来的にはやはりきちんと週5日勤務して、市の職員として館の館長として仕事に当たるのは一番相応しいとは思いますが。

【中島委員長】

小山さん。情報としてご意見いただけますか。

【小山委員】

島さんがご存じだと思うのですが、美術館会議という世界中の行われるのがあるのですが、確か館長が専門職じゃないといけないというのがあると聞いたのですが、そういう感じなのでしょうか。

【島委員】

概ねそうですね。ただし理解のある行政職が館長でいた場合、副館長が学芸でやりやすくなる場合もあります。これも一概に言えないものですね。

【小山委員】

全体でうまくなればいいのではないですかね。

【青野委員】

群馬県について言えば、最近県立美術館も博物館も、一般職、行政の方が館長をおやりになって、専門職の方が「特別館長」に変わりましたよね。ここ数年の間に。

【中島委員長】

田中課長。1回目から3回目（の会議）でコンプライアンスという事案を扱ってきて、「コンプライアンスは遵守していきましょう」と言うことであれば、アーツ前橋のそれにならって、一般職（の館長）、特別職の専門家、そういう流れで館長を招聘しましょうという理解でいくということでもいいですね。

【田中委員】

市としてそういう方針が今定まっているわけではないのですが、法律の改正に対応した流れと言うのが一部に出てきていますので、新しく館長をこれから決めるのであれば、そういったことに則るのは、ひとつのあるべき姿であるとは思いますが。

ただ、大事なのはやっぱり一般職であろうが、特別職だろうが、「専門性」が担保できているというのが大切だと思います。

【中島委員長】

ちょっと歯切れの悪いまとめになるのですが、今（田中）課長が言ったように、特別職であったとしても（一般職であったとしても）専門家である大前提、かつ、前のテーマで議論いただいた「現代アートを扱える」、一言つけさせていただくとすれば、「地域を巻き込める現代アート」、あるいは「子どもたちを巻き込める現代アート」を扱える専門家が理想かなと思うのですが、この点、金井さん、意見、何かあったよね。

【金井委員】

この間流れてきた（事務局からの）メールを拝見して、質問として僕はここ（事前意見）に書いたのですよ。

前回の（会議の）あと館長の話が出てきたのですが、今質問されたのとは違うのかもしれないけれども、ちょっとよく分からない。そのメールが。

「一部の委員から館長はここで決めるな」、それから「議会で話があった」、だから「これは市が決めます」と。そんなようなメールだったのですね。

であれば「この場は何のための場なのですか」と。

2回目の議事録を拝見した時に「市長はこここのところで館長を決めてください」とそう言われたわけですよ。我々はそれに責任があるわけです。

それを「市でやってください」と。どういうことですか。それが大きな疑問だったのですね。

それは、いいですよ。ここで館長像を話し合っただけでそれで市にお任せすると。では、具体的に市の誰が決めるのですか。市長が決めるのですか。

公募というのは、僕は賛成ですね。それで公募がいっぱい出てきたところを誰が決めるのですか。市長が決めるのですか。我々は市長からそう託されたわけですよ。そのあたりを考えていただきたい。

簡単に市にお任せしますではいけません。

【中島委員長】

その件に関しては徳野君。(田中) 課長。

【事務局 (徳野副館長)】

私が言ったところを(田中)課長から補足していただきたいと思うのですが、今回、館長選任に向けた意見と言うことで、第3回委員会の後、一部の委員さんから、館長は館の設置者である市が主体的に決定すべきというご意見をいただきました。

また、先日開催された市議会本会議でも質問があり、(事前意見を委員に伺ったメールでは)「ご意見をいただいたことから市が責任を持って選任したいと思います」という流れがありました。

これは少し書き方が違うところがあると思っていて「ご意見をいただいたから」ではなく、元々この委員会の設置目的があったと思いますが、検討委員会の設置要領でこの委員会の目的は「中長期的なアーツ前橋のあり方を検討する」、所掌事務は「開館後の活動を振り返りアーツ前橋の現状と課題を整理すること」、そして「中長期的なアーツ前橋のあり方の検討に関すること」。

第1回会議の冒頭や第2回会議の時に「この会議の目的が3つあります」と私からか田中委員からだった(お話しした)かもしれないですが、1) 今回の紛失事案を受けた「作品管理」や「コンプライアンス」といった「再発防止」を行うこと、2) 「今後のアーツ前橋のあり方」について事業とかを含めて行うこと、そして3) 「それに相応しい館長像」という話をして、小山委員から「いい人・悪い人(ということなの)」という話が出たかと思いますが、その時に「市長から信託を受けているのかどうか」という話があったかと思うのですが、そもそも人事に関しては、市長、行政の長である前橋市長が決定するものであり、その先の「決定をどうするのか」は、改めて田中課長や私が(市長に)確認したけれども、その中でも市長は「この件に関しては条件設定をする場」というのを確認させていただいたところです。

議員さんに関しては、第1回、第2回の(アーツ前橋あり方検討委員会の)議事録を見て、実際議会議録は(映像配信として)インターネット上に出ており、別に一部の議員さんから事務局になんとかするよという話ではなく、議会の本会議の場で議員さんから(質問が)出た。しかも市長会派の議員からこういった話が出た。

ポイントをお話すると、

「今回のお借りした作品紛失事案を受けて、アーツ前橋あり方検討委員会がスタートしました。議事内容を拝見させていただきましたが、個人的には会議録の内容に違和感を覚えています。今後の議論方針について伺います」

ということ（質問）で、担当部長である文化スポーツ観光部長が「再発防止のための中長期的なあり方を検討するために設置したものです。

第1回会議では設立経過や紛失事案の概要を全員に共有して、第2回と第3回委員会で作品管理やコンプライアンス、リスクマネジメントと言った再発防止のことを意見交換しました。

今後は信頼回復に向けたアーツ前橋のこれからの活動を議論して、最後にそれまで意見を踏まえて今後のアーツ前橋のあるべき姿に相応しい館長像について話し合う予定です」と（答弁しました）。

その次に議員さんから、

「相応しい館長像とあったけれども、第2回までの議事録に目を通すと、館長人事まで決定できるような発言も一部ありました。

このような委員会の認識と進め方に対して大きな疑念、疑問を感じています。

そういった館長像の議論は、あっても私は良いと思いますが、委員会が館長を決められるような話は乱暴で無責任すぎるのではないかと思います。

館長の人選は、館の設置者である前橋市が主体的に責任を持って行うべきだと考えておりますが、次期館長についてどのように決定していくのか伺います」

ということ（質問）で、これは市長も確認しているところですが、

「ご指摘のとおり、アーツ前橋あり方検討委員会というのは再発防止に向けた、アーツ前橋のあるべき姿について十分な議論を行い、それを踏まえて、今後のアーツ前橋に相応しい館長像について話し合う場であると考えております。

従いまして、あり方検討委員会からの提言を参考に、今後のアーツ前橋にふさわしい館長を選任してまいりたいと考えております」

というのが部長の答弁です。

最後に議員さんから要望的なこととして、

「前回の館長の決め方と言うのが、運営検討委員会で決められたというのがあったと思いますが、もちろんその時はそれが最善だと考えられたのだと思いますが、同じ轍を踏まないよう、館長人事は市が責任を持って主体的に取り組んで欲しいと思います。

私はこの一連の会議で、まず再発防止について話が展開されると思っておりました。作品所有者に対する謝罪に、言葉だけでなく姿勢で示すべきだからと考えていたからです。その話が収束する前に館長人事の話が出てくるとは、作品の所有者にとってのこの会議は何色に見えるのだろうか気になりました。

検討委員会には、公立美術館を持つ意義を議論していただければ、アーツ前橋の今後に向けての方針も見えてくるのではないのでしょうか。まだ時間はあります。今後の動向を期待しています」

という流れだったわけです。これが事実の経過になります。

ただし、それでもどちらがいいというのは十分あると思いますので、「この委員会で決める」という意見もあるでしょうし、「そうじゃない」という意見もあると思いますので、ご議論いただけたらと思っております。

事実の経過です。補足がありましたら（田中）課長からお願いしたいと思えます。

【田中委員】

特に補足はありません。

せっかくこういった御意見をいただいたわけですから、そういったことも含めて議論をするというのはありかと思えますので、その辺は委員長の方で進めていただけたらと思えます。

【中島委員長】

大橋さん。

【大橋委員】

私は第1回（会議）をオンラインで（参加して）、市長がどういう、それに対して、館長を決めてくださいと言ったのかちょっと記憶が無いので。

金井さんが言っていることは一理あると思うのですが、私は本来的にはここに書いたとおり、私がこの委員を受けたのは、「再発防止に向けた提言」と「今後のアーツ前橋のあり方」を徹底的に議論してその方向性を示す。

そのために私は委員になったつもりでおりまして、具体的な館長候補名をここで、この会議の場で上げて議論するのは相応しくないと私は思います。

私自身も、なぜこの検討委員会の委員に指名されたかについては、アーツ前橋と商店街は深い関わりを持っていますので、地域の代表として今後どう関わっていくかという観点から意見を述べろ、という意味もあって招聘されたのかなと思っております、この会議で館長を決めるのであれば、それなりの市民の付託を受けて、この場で館長候補を出して決めますという前提に無いと、私は市民に対しての説明ができない。

そういう付託を私は受けていないと思えますので、私はこの場で具体的な館長名をやり取りするのは相応しくないとというのが結論です。

ただし、館長は非常に大事です。館長によって今後アーツ前橋が決まってくると思うのであります。

その館長をどうやって選任していくのか、非常に大事なプロセスになると思いますが、私はアーツ前橋の学芸員がこれから具体的な仕事をしていくのだと思えます。

学芸員とアーツ前橋の事務職も含めて、内部で徹底的にどういう館長が必要なのか、どういう人だったら相応しいのかを、まずはこの場よりもっと前にやるべきではないでしょうか。

それは小山さんも指摘されていたと思いますが、それがあって、具体的に内部で検討した結果、こういう人選が出ていますというのをもっと高い視点で前橋市に検討していただき、それを我々がその段階、この人についてはどうだというのはありだと思えますが、この場で決定すべきではないと思っています。

その条件について、「こういう人が相応しいのではないか」というのを議論して、方向性を示していく必要があると思えます。

1番から7番まで挙げましたが、表現は違いますけれども島さんが言われたとおり、島さんの9つの箇条書きに重複するところがほとんどだと思っています。

最後に書かせていただいたのは、こういう状況と言うのは美術界でも相当知られていると思えますので、この状況の中でアーツ前橋の館長を引き受けるというのは相当大変なことだと思えます。

それなりの、全部（現状を）わかった上で、アーツ前橋が復活していくために館長を引き受けるという覚悟をもって、最終的にお願いしないといけないと思えますが、そのためには、先程から出ている、アーツ前橋を支える我々も一緒に「この問題をこれからもやっていきます」「考えていきます」という、館長一人の問題ではないという覚悟を示さないといけないと思えますし、選任する側もアーツ前橋の館内も、それから前橋市もその覚悟をもって、そして、その館長に寄り添っていく、献身的になること、というのが、私は必要な条件だと思っています。

【中島委員長】

島さん、お話しいただける時間ありますか。

【島委員】

（時間の都合）これで失礼しますが少しだけ。

僕の経験で言うと、学芸員の立場で「こんな館長が良い」というような議論はしたことがないです。ただし雑談レベルで、「あの人が来てくれたらいいかもね」というような話をしたことはありました。

現場の学芸員の人たちもいろいろな思いをお持ちなので、多少具体的なイメージで「あの人が」とかいうことがあるかもしれませんが、それをベースにしながらやっていくといのはちょっと無理があると思えます。

【中島委員長】

ありがとうございます。

今の議論なのですが、記者の方が入っていて、傍聴人の方が入っているこの委員会で、具体的な固有名詞を出して議論するというのは、あまりにも固有名詞を出す方に対して失礼だという話なので、それは避けるべきと言うのは当初からお話をしたつもりです。

先程、金井さんが言った「じゃあ前橋市が責任を持って決定する」って、前橋市って誰がどこで、どうやってという疑問が残りますよね。

これは技術的にどうやって決めるの。我々の手から離れたときにどこが決めるのですか。「前橋市ってどこ」という説明は、田中さんできますか。

【田中委員】

具体的にどう決めるかと言うのは、まだこれからだと思いますが、いろいろやり方があると思います。

別途の公募の委員会みたいなものを立ち上げて決めるということもありますし、先ほどの公募と言うのもあると思いますし、最終的に市の職員ですから、任命権者である前橋市長が最終的に判断するということです。

【中島委員長】

僕としたら、僕が発言した内容が、もし議会で問題になっているのだとしたら恐縮な話なのですが、「あり方検討委員会」という委員会が設置されて、紛失事案だけを扱って、次期館長人事が扱えない「あり方検討委員会って何」という疑問は残ります。

なので、当初これは、課長を含めた冒頭の委員会だったか、ちょっと議事録を確認できていないのですが、非公開の場で選定をする、選任をするというような仕組みは、僕は残しておかないと、「あり方検討委員会」の手から離れたところで館長が決まっていくというのは、腑に落ちません。

というところだけ僕は意見を申し述べたい。

【金井委員】

僕が提案を示したのは全くそのところで「じゃあ誰なの」と。「責任を持つて」って誰が責任を持つ。そこですよ。専門家がない中でどうやるの。

またこれは解散して別の委員会を作って、そこでもまた「ここで話し合うべきことじゃない」と言ったらとんでもないことになるよ。

さっきのように公募、それを持ってそこから良い人を挙げる。

それもひとつの手だし、これだけの人たちがいるわけだから、この中の人た

ちの中にも「この人が来てもらいたいな」という人がいるかもしれない。もしそういう人がいたらと思って前回発言したわけです。誰かがいればね。

そういうことですので、単にこれは市のことだから、ここではやめましょうでは済まないと思います。

【中島委員長】

小山さんどうぞ。

【小山委員】

僕が前にメールか何かでお送りして、皆さんに転送してもらったのですが、僕の希望としては、この「あり方検討委員会」というのは、「どういう形で館長を決めるか」ということまでは決めていいと思うのですが、人事に関しては市が責任を持ってやるべきで、その「市」というのは、アーツ前橋でもあるし、アーツカウンシルでもあるし、市の他の職員でもあるし、市長でもあると思うのですね。

それが前橋市だと思うので、僕は「公募」という形で提案させてもらったのですが、やはり不透明な中で決まっていくのは、今の状況の中で相当良くないと思うのですね。

大概の美術館というのは、「この人が次の館長ですよ」と言われてポンと来るのですよ。それは、この状況では良くないのではないかと考えて公募と言うのを言ったのですが、公募は先ほど金井委員が言っていましたが難しいのかね。そういうのを決めてもらえればそれが一番いいと思うのですが。

相当大変ですが逆にその中でいろいろなことが生まれてくるとは思うのですよね。

【中島委員長】

僕の考え方ではまとめきれないので、(田中)課長。最後に課長権限で「こういうふうにしたい」という課長の意見を聞かせてもらえるかな。

さっき言ったような形で、僕と課長の間では「非公開の場で決めていくしかないよね」と言う話で、僕は今までそういう理解でいるのだけれども。

【田中委員】

基本的には、公開の場で個人の評価を行うというのは、これは絶対にやめるべきだと思います。

【中島委員長】

今日の段階ではそこまでしか決められないということ。それとも。

【田中委員】

今日の段階で決めたいのは、というか意見をもらいたいのは館長像ですね。

今日いただいた資料にもいろいろ書かれておりますが、そういった館長像については議論をしていただきたいというのがあります。

それをもとに答申を作るという形で行きたいです。

【中島委員長】

この委員会では具体名は提言しないということ（でしょうか）。

先程の金井さんの質問「じゃあどこで決めるの」ということは、あり方検討委員会の手から離れて、誰がどこで決めるのかと言う、そこは。

【大橋委員】

そのことで「公募という選定方法もありじゃないか」という意見が小山さんからの意見書にありました。金井さんもそれもいいのではないかと。

私も状況が許せば、公募と言うのも、不調に終わるかもしれないし、公募と言うことがマイナスになる可能性が無きにしてもあらずと思いますが、こういう状況の中である程度皆さんが納得して、透明感ある決め方と言うのは、「公募」というのは、決め方としてはありかなと思いますけれども。

その選定方法についても、あり方に関する提言と言うのも、決め方に関する提言と言うのも、ここは（この委員会の）守備範囲だと思います。その辺どうでしょうか。

【中島委員長】

公募で行きましょうという決定して良いの。この委員会で。

【大橋委員】

今この場で「公募で行こう」というのは乱暴なので、もし必要があればもう一回、どういう条件だったら公募ができるかというのをやった上で、あまり乱暴に決めない方がいいと思います。

【中島委員長】

ちょっとごめん。僕にはまとめきれない。この事案に関しては。

しかも、議会で批判を受けているのだとしたならば、議事録としてこの会話さえ議事録に残してほしくないよね。僕は。

【田中委員】

この委員会で、決め方としてどれか一つと言うのはなかなか。こちらもそれを受けてそのとおりにしなければならないとなってしまうこともありますので、この委員会の決定に必ずしも従わなければならないわけではないですが、それを無視したらこの委員会の意義は何だったのかということがあるので、できれば、公募も含めて、後はこれとは別に選考委員会を開くべきだとか、そういうことも頂いて。

その大前提として、公募で判断する際にも、別の委員会で判断する際にも材料となる「こういった館長像」というのを意見としていただきたいというのが一番です。

【中島委員長】

先程青野さんが発言なさった際に僕がお話した、現代アートが扱えて、かつ、地域を巻き込める企画、子どもたちを書き込める企画ができる館長像というようなまとめ方をさせていただきたいと思うのですが、これに関しての意見、金井さんがあったんだよね。

【金井委員】

僕は、館長は最初に言ったように「本当に熱を持った人」。それで「責任を持って誠実にやる気持ち」が一番だと思うのですよね。

現代美術がわかるとか、子どもたちにわからせるとか、そういうことは二の次だと思うのですよ。

それは僕が前に発言したと思うのですが、前館長が就任したときに僕が言ったことがあったのですよ。前館長はいわゆる現代美術専門ですから「政治やって欲しい」と頼んだことがあった。

「政治」ということは、自分だけの専門だけやるのではなくて、前橋の美術館として、アーツ前橋としてみんなに好かれるような美術館にしてもらいたいということで、彼の趣味に合わないかもしれないけれども、そういうこともやってもらいたい、「政治」をやってもらいたいと言った。

だから今回も、これからも最初に言ったように、館長が自ら会場に行ってお客さんとお話をするとか、そういう熱心さですよ。

それが、田中さん、やったことがありますか。

【田中委員】

副館長の時にやりました。

【金井委員】

それはえらい。青野さんは結構それをされているのですよ。

その辺を、熱を持った人が第一だと思っております。いわゆる現代美術に特化したとかいうようなことはしない方がいいと思います。

【中島委員長】

と言うことも含めて館長像ということで、今日のところはよろしいですね。

非常にセンセーショナルなアーツ前橋が全国に発信されているところで、今後と言う状況で発信した時に、どんな反応があるか非常に楽しみでもあり、不安でもある。

そんなあり方検討委員会の答申でいいということですね。

【大橋委員】

先ほど「公募もありではないか」と申し上げましたが、公募でやって欲しいということでの提言はあり得ないと思います。

提言の中で「公募という方法も検討すべきだ」という表現で私は抑えておく、複数の方から意見が出ているのでそうすべきかと思えます。

後は「条件を示す」ということであれば、私は島さんが書いていただいたこと、その中に中島委員長が仰ることも多分に書かれていると思いますので、島さんが仰られていることを基本にして、後は、共通項をまとめていくということで、事務局で作業をしていただければ、おのずとこの場に出ているのではないかと感じております。

【中島委員長】

わかりました。それでは事務局にお渡しします。

【事務局（徳野副館長）】

最後に大橋委員からもあったのですが、一番館の運営とかの経験がある島委員が時間の都合で最後退席になられましたが、公募もという中で、その他の方法の意見も島委員からあったかもしれないので、その部分は議事録の確認を展開する中で、島さんのご意見も反映させながらまとめたいと思っております。

それから館長像については、皆さんから集めたご意見を取りまとめた形で集約をしたいと思えます。

4 その他

【事務局（徳野副館長）】

最後 次第の「4その他」として、今回で予定していたところは全て議論したところになるのですが、次回は第5回。1回延長したところで、最終報告書・提言案の確認という作業になると思います。

皆さんのところに資料を参考としてお配りしてありますが、「アーツ前橋あり方検討委員会 最終提言書記載事項（案）」として、冊子としてまとめていく目次的なものになりますが、最初に検討委員会の概略、各会議の議事項目など、次に「2紛失調査委員会からの提言概略」、それを受けた「3あり方検討委員会からの提言」、この「3」のところをしっかりとまとめたものを提言の形にさせていただきたいと思います。

委員さんの任期は10月末までとなっておりますので、それまでに事務局でまとめて事前に展開して確認いただき、その上で会議をしたいと思っています。

日程については、この後、改めて調整をさせていただきたいと思ひますし、その時のコロナの状況がどうなっているかわかりませんので、場合によっては事前に資料を見ていただきオンライン開催という可能性もあるかもしれませんが、ご了承くださいましたらと思ひます。

5 閉会

【事務局（徳野副館長）】

長い間ありがとうございました。第4回アーツ前足あり方検討委員会をこれで終わりにさせていただきます。

ご連絡ですが、アーツ前橋では、「新収蔵作品展2021」の展示替えをしたⅡ期目の展示を行っております。10月31日までが会期で、次の会議でも開催しておりますが、本日お時間ございましたら、よろしくお願ひいたします。

ありがとうございました。